また夏がきて

創作脚本

洲浜昌三　作

キャスト		劇中劇の役
村瀬紀子	（元演劇部員、中学校教師）	サケのさくら
浜村貴子	（元演劇部員、元看護士）	ボラ
町田由紀	（元演劇部員、大学中退）	園児
北川美和	（元演劇部員、主婦）	園児
林　耕治	（元演劇部員、会社員）	亀
高村五郎	（元教師、演劇部顧問）	照明・音響
高村暁子	（高村五郎の妻）	

「また夏がきて」について

高村五郎は定年前に退職。家を改造して、「多目的ホール」を作った。農作業や地域の集会、演劇等の練習にも使える。

ある夏、十年ぶりに演劇部の卒業生たちが訪ねてくる。彼らは高校のときこの先生の家で合宿したことがある。

卒業生のその後は様々。紀子は英語教師。精神的な悩みで不登校状態。由紀は大学中退。貴子はアメリカへ行く。美和は二人の子供がいて忙しい。耕治は会社員。高校の時、高村から強引に演劇部の合宿に連れて来られた。

高村は「こけら落し」に高校の時の劇の一部を上演してくれと言う。紀子が高校の時書いた劇だった。劇を終えてみんな帰っていく。紀子が引き返してきて、深々と頭を下げ、夜の中へ走って行く。坂の下から声が聞こえる「高村先生、ありがとう」。「また夏がきたら来いよ」と手を振る高村と妻の暁子。

テンポよく楽しく展開する中で、主人公の苦悩と喜びを伝えたい。

劇中歌が二曲。最後に楽譜を添付。**「高校演劇Selection」に掲載され主に高校や大学、アマチュアー劇団で上演されたが、内容的に一般の人を対象にした劇としても上演可能。**

上演時間は約一時間。（２０２３１０１６洲浜昌三）

また夏がきて

洲浜昌三 作

蝉の鳴き声。やがて坂の下（舞台下手の奥）から三人の声。

三人の声　た・か・む・ら・せん・せー

幕が上がる。下手から、再び「せんせー」という三人の声。高村先生、庭へ出て来る。農作業姿。「おーい」と手を振る。三人（浜村貴子、北川美和、町田由起）走って来る。夏の日差しがまぶしい。

貴子　先生、久しぶりです。

美和　お元気ですか。

先生　ああ、どうにか生きているよ。

由起　先生、ちっとも変わっていない。

貴子　そうそう。色が少し黒くなっただけ。

先生　そうか。苦労したからな。卒業してから何年だ。

貴子　十年になります。

先生　もうそんなになるか。

由起　昨日、同窓会があったんです。三人が一緒になったから、先生を訪ねてみようということになったんです。

美和　先生、退職されたって、本当ですか。

先生　ま、中に入れよ。
由起　どうして退職されたんですか。まだ退職の年じゃないんでしょ。
先生　いろいろ考えるところがあってな。早めに辞めたんだ。
貴子　どうしてですか。
先生　ぎりぎりまで勤めてぽっくりあの世へ行ってしまってもつまらんだろ。そういう人が多いからな。
貴子　なーんちゃって。本当はパワハラで、これ（首に手を当てる）になったとか。
先生　あったり！　と言いたいけど、期待はずれだ。優しい先生とみんなから言われていた。
美和　アンビリーバブル　！「何？予習してきてない？放課後校庭一周だ！」
由紀　そうそう。暗唱文テストでも、覚えていないと、「十回書いて帰るまでに提出！」
先生　それは、大昔の昔話だ。最後は大人しくてとても優しい先生だった。
「ほんんとかな」「あやしい」などと顔を見合わせて笑う。
部屋の中を見回す。箱足や平台なども墨にある。
美和　この絵は、先生が描いたんですか。
由起　こんな趣味があったんですか。
先生　余裕ができたから、また始めたんだ。
貴子　この家は建て替えたんですか。
由起　合宿したときこんな部屋はなかった。
美和　ここは庭だったところじゃないの。
貴子　あ、そうか。庭だったんだ。
由起　なつかしいな。

貴子　三回も合宿したもんね。

先生　おい、何か飲むか。いちご酒、ぐみ酒、しそ酒、カリン酒、レモン酒、梅酒、ティッシュ、スマッシュ、パトラッシュ　なんでもあるぞ。

貴子　さむーい

由起　そんなの古いですよ。

先生　（礼をして）酒もあるぞ。（去る）

　　三人、きょとんとしている。

貴子　…あっ、冷酒！

由起　うまーい、先生。

貴子　今までの中で最高じゃない？

美和　そうかもね。

由起　耕ちゃんと紀ちゃん、本当に来るのかな。

貴子　ここへ来る前にもう一度電話しといたから、来ると思うよ。

美和　紀子は中学校の先生をしてるんでしょ。

由起　そうよ。これはね、人から聞いた話なんだけど、今、学校を休んでいるみたいなの。

美和　どうして？

由起　精神的に参ってるんじゃないかって話。

美和　本当なの？

貴子　何かの間違いじゃないの？

美和　きっとそうよ。紀子はしっかりしてるもん。

先生、上手奥の台所から梅酒やジュースやコップを盆に載せて持ってくる。
三人は気が付かないが、先生は途中から会話が耳に入っている。

由起　そうだといいんだけど・・・私、先生をしている叔母さんから聞いたの。
貴子　そうか、電話ではとても元気そうだったけどね。
先生　五年前に漬けた梅酒と梅ジュースだ。うめーぞ。ま、飲んでみろ。
　ジュースをコップに注いで飲む。
三人　いただきまーす。
貴子　うめーしゅ。
由起　（ぷっと吹き出して）やめてよ。
貴子　ごめんごめん。
由紀　貴子は、近いうちにアメリカへ行くんでしょ。
美和　もう決めたの？
貴子　まあね。でも目下、親の強力な抵抗にあって、激しいバトルの最中。
先生　看護大学へ進学したんだよな。
貴子　そうです。子供の頃からなんとなくあこがれてたから。でも…。
先生　やめたのか。
貴子　卒業して病院に勤めたんですよ。だけど、自分には何か向かないような気がして来たんです。気分転換にアメリカ旅行へ行った時、彼と知り合ったんです。
先生　吉田はどうしてるんだ。
美和　いま結婚して北川になっています。平凡な主婦をやってまーす。

貴子　美和ね。大学時代の彼氏と一緒になって、子供が二人もいるんですよ。この幸せそうな笑顔を見て。こぼれそう。

美和　子育って大変なんだから。

由起　まだ可愛い盛りでしょ。

美和　そりゃそうだけどね。いろいろあるの。

先生　町田は？

由起　……ちょっと……

先生　……理学部へ進学したんだよな。

由起　…ええ……でも…。

先生　今どうしてる。

由起　こっちに帰ってるんです。家事手伝いです。

先生　家事手伝い？・・・そうかぁ。

貴子　先生、奥さんは？

先生　さっき孫を五、六人連れて町へ行った。盆の花火大会があるだろ。あれを見て帰るんじゃないか。

美和　合宿の時には、いつもおいしい料理を食べさせてもらったね。

由起　そうそう。練習が終わってから食べた夜食のおにぎりの味は忘れられない。

美和　時には奥さんのお琴の調べが、優雅に庭に流れて来て。うっとり聞きほれて。

貴子　たまに先生が庭に出て来て、「おい、練習したところをやってみろ」「三十四点。欠点だ。話にならん。」それでまた猛練習。

由起　議論ばっかりして、一つも進まないこともしょっちゅう。

貴子　おばあちゃんが出て来て、「いい加減に、けんかはやめんさい！」

美和　そうそう。（みんな大笑い）

由起　つらかったけど、楽しかったな。もうあんなことは二度とないよね。

美和　そうね。みんな本音でぶつかったもんね。

　坂の下で車の止まる音がして止まる。

貴子　あっ、来た。

美和　耕治君かな。

由起　紀子も一緒だといいけど。

美和　そうだね。

貴子　先生、おばあちゃんは？

先生　三年前に亡くなった。

貴子先生　おいくつでした？

　八十八だ。戦後この山奥に入植して、おやじと二人でここを開拓したんだ。鍬（くわ）で山を耕したんだから、大したもんだよ。ちっぽけな掘建（ほったて）小屋からのスタートだった。電気もなし、水道もなし。一時はこの開拓地にも十二軒の家があったけど、次々と都会へ出て行ってしまって、今じゃ五軒だ。

　林耕治と村瀬紀子が下手から姿を現し、庭に近づく。

　紀子は意識的に明るく振舞い、喋る。しかしふとした時、沈んだ表情が覗く。

耕治　こんにちは。

紀子　こんにちは。

先生　おお、来たか。待ってたぞ。
耕治　お久しぶりです。ちっとも変わってませんね。
先生　この年で変わりようもないだろ。
耕治　よぼよぼかと思った。
先生　勝手な想像をするな。（みんな大笑い）
紀子　ご無沙汰してました。
先生　元気そうで何よりだ。さあ、どうぞどうぞ。
耕治　遅くなってごめん。
貴子　さっき来たばかりよ。紀ちゃん久しぶり。元気だった？
紀子　うん。見ての通り。のんびりしてるから少し太っちゃった。
美和　昔と変わっていないよ。スマートで、足が長くて。指もほっそりして。
紀子　からかわないでよ。
美和　私と比べたらっていうこと。
紀子　ギャフーン。
　　みんな、大笑い。
耕治　先生の家は山奥ですね。再認識しましたよ。坂の途中から砂利道になって舗装してないんだから。
先生　ほ、そうか。
　　笑い。
耕治　全然進歩してないですね。こんな山奥で毎日何してるんですか。
先生　晴耕雨読だ。

耕治　仙人みたいですね。

先生　だがな、何も「せん・にん・げん」じゃないぞ。

　　笑い。

先生　これからが俺の人生だ。

耕治　で、何をやってるんですか。

先生　百姓。油絵。読書。郷土史研究、演劇。今はそんなところだ。

紀子　演劇って、どんなことをやってるんですか。

先生　この村に伝わっている民話を元にして脚本を書いている。

紀子　誰が劇をするんですか。

先生　まだ決まってないけどね。

紀子　楽しみですね。

耕治　先生、この部屋は何の部屋ですか。箱足はあるしライトが釣り込んであるし・・・。

先生　マルチ多目的ホールだ。倉庫兼作業場、兼集会場、兼近所の子供の遊び場、兼動画映写室、兼演劇など合宿練習場、兼応接室、ケンケンケンだ。何にでも使える。この前は村の子供達が集まって朗読会を開いた。夕べは村の人たちが踊りの練習をしたりカラオケを楽しんでいたよ。あそこに小さい調光器もあるし、スクリーンやプロジェクターもあるぞ。

耕治　すごいな。

貴子　先生。「楽しいことをやって、飯が食えて、人に喜んでもらえたら最高の人生だ」ってよく言っておられましたよね。

紀子　そうそう。

先生　そうだったかな。

由起　何度も聞きました。

先生　人生の最後ぐらいは、それを実践したいからな。

貴子　ねえ、おぼえてる？十年前、ここでやった合宿。

紀子　「エメラルドグリーンーぼくたちのふるさとー」。

　　各々、「覚えてるよ」「そうそう」等という声。

貴子　あの時、耕ちゃんが急に演劇部に入って来たのよね。覚えてる、耕ちゃん。

耕治　覚えてるよ。忘れるもんか。

由起　なんで合宿へ来たの？

美和　びっくりしたんだよ。急に耕ちゃんが、先生に連れられてここへ来たから。

先生　耕二が、演劇部に入りたいと言ったからだよ。

耕治　嘘だよ、先生。俺なんか、演劇部の奴、あほじゃないかと思ってたもん。学芸会みたいに、なんか格好つけてよ。「アーオーウーエーイー」なんて、間抜けな大声を張り上げてよ。

貴子　じゃ、なんで演劇部に入ったのよ。

由起　紀ちゃんがいたから？

耕治　馬鹿言え！

貴子　あの時の耕二君って本当にひどかったもん。

由起　そうそう。

美和　なんでこんな人が入って来たのかって思った。ねえ。（紀子へ向かって）

紀子　うん。もうこの劇はおしまいだって思った。

耕治　ひどいな。

紀子　本当なんだから。「亀のじっつぁん」の感じがちっとも出せないんだもん。

貴子　紀子が書いた台本だったのよね。

紀子　原稿用紙六十枚。大変だったんだから。

由起　鮭（さけ）の「さくら」さんが北の海からふるさとの海へ帰る途中、いろいろと危険な目に遭うんだけど間違って発電所の排水口の中へ入って行ったのよね。あの場面の練習は大変だった。

貴子　そうそう。もう劇は駄目かと思った。

音楽が入り、照明フェイド・アウト。

回想。演劇部の練習場面。上着だけでも体操服など高校生らしいものに変える。

由起が「さくら」を演じ、耕治が亀のおじいさんを演じる。

台本を書いた紀子が演技指導をしている。他の部員は見ている。

練習場面に照明。

紀子　ここに発電所の大きな排水溝があります。鮭のさくらさんがこの中へ入って行こうとしたら熱い湯が流れてきて倒されます。それを見た亀のおじさんが近づいてきます。はい、どうぞ。

さくら　ああ、熱いよー。熱いよう！誰か助けてください。熱いよう。

亀　おい、どうしたんだ？

紀子　だめ！空き巣に入ろうとしてるんじゃないのよ。こんなに（おおげさに真似て）のっそり、のっそりと出て来たら、誰だって空き巣ねらいと思うじゃない。

耕治　そんなつもりじゃないんだ。

紀子　じゃ、どういうつもりなのよ。

耕治　助けに来たんだろ。
紀子　そうよ。分かってるなら、その心が見えるように動作で表してよ。
耕治　そのつもりなんだけどな。
紀子　自分はそのつもりでもその気持ちを具体的に体で表現しないと駄目なの。目の前でさくらさんは、発電所が流した熱湯を浴びて苦しんでるのよ。その苦しみが分かってないからよ。もう一回やって。はい、どうぞ。
さくら　ああ、熱いよー。熱いよう。誰か助けてください。熱いよう。
亀　おい、どうした・・・。
紀子　だめ！運動会の球ひろいじゃないのよ。（オーバーに真似て）こんな風にちょこちょこと走ってきたら、何のために出て来たか少しもわからない。さくらさんは死にかけてるのよ。
耕治　だから急いで出て来たんだろ。
紀子　あれじゃ球ひろいなの。ぜんぜん形になっていない。それに、熱湯が流れ出してるのよ。その感じがちっともでていない。
耕治　どうすりゃいいんだよ！
紀子　自分で考えてよ。おじいさんはどんな格好をしてるか。走る時にはどんな走り方か。死にかけている人を助ける時には、どんな動作をするか。熱い湯が流れてきたら、どんな動きをするか。
耕治　そんなにいっぱいどうして表すんだ。体は一つしかないんだぞ。
紀子　誰もそうして生きてるんじゃないの。毎日いろんなものを見てるでしょ。見てないの？
耕治　苦しい時には苦しい時の言葉の言い方や顔の表情があるでしょ。当たり前じゃないか。

紀子　じゃそれを表現してよ。
耕治　簡単に言うけどな、どうすりゃできるんだ。
紀子　本気にならないからよ。
耕治　言っとくけどな、俺ゃやりたくてやってるんじゃないんだぞ。文句ばっかり言われて、こんなのやってられるか！やーめたと。帰る。
　　待ってよ。あとはどうなってもいいの。みんな一生懸命やってるのよ。
紀子　勝手にやれよ。
耕治　すぐそうくるんだから。格好ばかりつけて。
紀子　何が格好だ。
耕治　人の心をちっとも見ようとしないじゃない。私たちがどんな気持でいるか、少しも分かってないでしょ。
紀子　分かっているよ。
耕治　じゃ言ってみなさいよ。
紀子　俺が下手だからみんなで文句をつけてんだろ。
耕治　単純ね。ちっとも心の中は見てないじゃないの。自分の本当の心も見えてない。いつもそうなんだから。形じゃないのよ。おじいさんの形を演じるんじゃないの。自分自身を演じるの。自分を表現するのよ。
紀子　えらそうな口をきくなよ。自分自身って何なんだよ！
耕治　耕治君自身が考えたり感じたりしてること。鮭のさくらさんがふるさとの海へ帰る途中、かすかになつかしい水の匂いがする。この排水口の上流だ、と思って入って行く。そしたら急に熱湯が

流れて来た。卵子を産むために死にもの狂いで帰って来たのに、今、目の前で苦しんでいる。その無念さを想像するの。想像力を働かせるの。そしたら、耕治君の心の中に生まれてくるものがあるでしょ。怒りとか、同情とか、共感とか、自分を犠牲にしても助けてやりたいという正義感とか、勇気とか、憎しみとか。

耕治　・・・そんなことまで考えてやるのか。

紀子　そうよ。

耕治　ますます嫌になった。

紀子　また目をそらす。耕治君の中にも本当の自分があるはずだわ。その中を見なきゃだめよ。本当の自分を見ようとしなきゃだめ。格好や形じゃないんだから。そんな耕ちゃんをいつもみていると悲しくなる。

耕治　勝手に悲しんでりゃいいじゃないか。帰る。寄ってたかって説教なんてまっぴらだ。

先生　（袖幕の中から）待て、耕二！（ゆっくり歩いて、やさしく）俺にごあいさつ無しで帰ってもいいのか・・・。良くないよ・・・。よーく分かっているもんな・・・よーし、休憩。

音楽。暗転。

体操服を脱ぎ、回想場面前の位置につく。

照明は部屋の照明にもどる。

由起　あの時、耕治君本当に帰るかと思った。

美和　先生がひとこと言ったら急に大人しくなったからびっくりした。

耕治　首に綱がつていたもんな。

由紀　どういうこと？

耕治　先生言ってくれよ。

先生　永遠の秘密にして墓へ入るつもりだったけど、耕治がそう言うんなら、言うぞ。いいか。

耕治　いいよ、もう時効だから。はい、どうぞ。

先生　あの時耕治は下級生と喧嘩して謹慎中だったんだ。（「まあ、そんな、えっ」等）担任じゃなかったけど気になったから家庭訪問してみたんだ。案の定、家にはいなかった。そんな状態じゃ退学にすると言われてもしようがないもんな。お母さんも泣いておられた。それで担任だけには話してここへ連れてきたんだ。ちょうど合宿前に男子が一人、予備校の夏期講習へ行くと言って部をやめたもんだからね。男子が一人足りなかった。

「そうか」「なーんだ」「知らなかった」等々。

美和　それで塩をかけられたナメクジみたいに急におとなしくなったのね。

貴子　十年ぶりに原因判明ってわけだ。

由起　耕ちゃん今仕事、なにしてるの。

耕治　コンピュータの会社。ソフトの制作やら修正で、家に帰るのはいつも一時か二時だ。

由起　そんなに。大変なんだ。

貴子　よく体が持つわね。大丈夫？

耕治　今のところはね。でも、この状態がずっと続くのかと思うとお先真っ暗だよ。俺って何んだろうな、と思ってね。

貴子　気をつけてよ。今自殺する人が急増してるんだから。若い人にも多いのよ。

紀子　耕ちゃんは大丈夫よ。たくましいもん。

貴子　そう見える人が意外ともろいのよ。エネルギーを全部会社のために使っていると自分を支えるも

のが無くなってしまう。それに気がついた時、ポキッとおれちゃうのよね。まだ、見返りがあるうちは良いんだけど、リストラで急に首になったり、別の会社に出向させられたりしたら、今まで生きて来た意味を見失ってしまう。大学生にも今多いのよ。

耕治　そうだろな。俺の大学でもビルから飛び降りた学生がいた。高校の時は物理ができなくても、他の科目が好きだったり、部活動で好きなことをやったりしてたらバランスが取れるけど、大学で物理学科に入って、物理の能力がないと分かったら、逃げ場がないもんな。

由起　・・・恥ずかしいけど、私がそのタイプなの。（みんな、しばらく沈黙）数学科へ入ったのよね。数学の先生になりたいと思って。……大学の数学って全然違うのよね。

紀子　……あんなに数学の成績が良かったのに……。

由起　点数と能力を勘違いしてたのね。入学してすぐ分かったわ。

紀子　……今どうしてるの？

由起　家事手伝い・・・。父が園芸やってるのよ。庭木とか、公園や街路樹の管理。手伝ってるうちに楽しくなっちゃって。（生き生きと）この前なんかね。小さな児童公園の設計を父が請け負ったの。私は資格なんかないんだけど、いっぱい父にアドバイスしたのよ。頭の中にある夢を少しでも形にしていくって楽しい。

紀子　そうか。だから目が輝いてるんだ。大学をやめたって言うのは友達から聞いてたけど、やりたいことを見つけたんだ。

先生　数学科に入ったから良かったというわけだ。

美和　ひどい先生！

貴子　残酷ですよ。そんな言い方は由起に。

先生　すうがく。すーぐあく。すぐあく。すぐ飽きるから数学というんだ。
美和　冗談を言ってる場合じゃないでしょ。
紀子　そうですよ。
先生　でもな、もし、高校のとき町田に、園芸の道に進みなさい、と進路指導したらどうなる。親からも進路の先生からも猛烈に非難されるぞ。「成績がトップグループの生徒がなんでそんな道に進まんといけんのだ。高村先生は指導力がない。」　……そんな時代の中で君たちは高校生活を送ったんだ。遠まわりをしても自分を見つけた人は幸せというもんだ。そうでない人がいっぱいいるんだから。（しばらく沈黙）……村瀬はどうだ。学校は面白いか。
紀子　ええ、とっても。
先生　生徒は可愛いだろ。
紀子　はい。とっても。
先生　いたずらをしたり、怠けたり、できん奴ほど可愛いもんだからな。できるやつは放っといても自分でやる。できない奴が立ち直ったら最高だもんな。今でもこうして林耕治を見ていると喜びが泉のようにふつふつと湧いてくるから不思議だよ。
耕治　どういう意味ですか。先生。
　明るい笑い声。
先生　村瀬は英語もできるし、教えてもらう生徒も幸せだなあー。
紀子　そんな。
耕治　久しぶりに歌でも聴かせてくれよ。
紀子　何でー？

耕治　いいじゃないか。

三人　歌って、歌って。のりーこ、のりーこ。のりーこ。のーりこ。

貴子　ふるさとの川を下って、北の海へ向かう時の歌。（のーりこコールは続く）

美和　「エメラルドグリーン～ぼくたちのふるさと～」

紀子、立ち上がるが、また座る。

拍手、と、「紀子コール」が続く。

やがて、他のもの歌を口ずさみ始める。

貴子、紀子の手を取って立たせる。

紀子歌い始める。ギターが弾ける者がいれば前奏、伴奏する。

紀子　**潮が満ちて**

いつの間にか砂浜が消えているように

雲が流れて

いつの間にか青空が広がっているように

水のように　雲のように

遠い旅に出よう

痛みを残さず・・・・・

悲しみを・・残さず・・

（「エメラルドグリーンー僕たちのふるさと」藤原規生　作曲）

途中から声がうまく出なくなる。

とぎれとぎれになり、「ワー」と崩れる。

貴子　どうしたの？

美和　紀ちゃん、どうしたの？

由起　……大丈夫？

ストップモーション。照明、カット・オフ。

紀子にサス。

五人は声で中学生の役をする。（録音した音声でもいい）位置は座ったまま。動かない。

学校独特のざわめき。チャイム。

紀子、元気よく立ち上がり授業を始める。

紀子　Good morning.　おはよう。今日も元気でやりましょう。

How are you？Toshinori.　How are you？Toshinori.

としのり君・・・How are you？（先生の笑顔だんだん消える）としのり君

うるせえな。

A　うるせえってていってるだろ。親しそうに、名前なんか呼ぶなよ。

紀子　How are you？Toshinori.

A紀　How are you？って言われたら、どう答えるんだっけ。

子　知らねえよ。

A紀　I'm fine thank you.　だったよね。言ってみて。

子　気分が悪いのにそんなこと言えるか。ばかばかしい。

A紀

子　じゃ後でまたやってみようね。じゃみなさん一緒に答えてね。いい？　How are you？　How are you？　……　How are you？？　どうぞ。　How are you？……　次の時は、きちんと言ってね。　じゃ、　Open your textbooks at page forty three.

……四十三ページよ。さあ、開いて。・・・青木さん？　どうしたの？　教科書は？　……あるじゃない。だったら出そうよ。いいですか。……松坂君、机の上に伏せるの止めて、顔を上げようね。松坂君。こっち見て。松坂君！　聞こえないの！

B　すぐ怒るなよ。みっともないじゃん。

紀子　上原さん！　どこ行くの？

C　どこでもいいじゃん。

紀子　今授業中なのよ。

C　当たり前なこと言わないでよ。それくらいなこと分かってまーす。

紀子　じゃ席について。

C　トイレ。

紀子　トイレ？後で行きなさい。

C　後で？

紀子　そうよ。授業が終わって。

C　お腹が痛いんです。ひどくなったらどうしてくれんの。

紀子　少々のことは我慢しなきゃ。さっきまで元気に騒いでトランプしてたじゃない。

D　トランプしちゃいけないの。休み時間はなにしたって自由じゃん。ねえ。

C　そうよ。

E　先生達だってコーヒー飲んだり、たばこ吸ってんじゃん。
紀子　静かにして。静かにしなさい！（生徒達の話しは続く）
C　私達だって休み時間にはコーヒーやお茶ぐらい飲みたいよ。
E　持って来りゃいいじゃん。
C　そうか。あんたとこない？
紀子　静かに！静かにしなさい。
D　うち？　古いのならあるけど。
C　じゃ明日持ってきてよ。
D　ポット持ってくるから、コーヒー持ってきてよ。
B　いいよ。
紀子　静かにしなさいって言ってるでしょう！
B　便所はどうするんだよ。上原、待ってんだよ。
紀子　じゃ上原さん早く帰ってくるのよ。
C　はーい。
紀　じゃ、教科書開いて。四十三ページよ。・・・・何してんのよ！開きなさいって言ってるでしょ！
A　先生。きゃんきゃん怒ってちゃ可愛くないよ。
E　美人がだいなしになるよ。
D　そうだよ。
紀子　そんなこと関係ないでしょ！

A　あるじゃん。
B　ガミガミ言われたらやる気が起きねえよ。
E　せっかくやる気になってたのにね。
D　やる気がなくなったよ。
紀子　新庄君！どこへ行くの！坐ってなさい。
A　ロッカーへ教科書取りに行くのがいけないのかよ。
紀子　その反抗的な態度はどういうこと。
A　反抗なんかしてないっすよ。教科書取りに行くつってるんだよ。
紀子　あとで職員室へ来なさい！
A　他の先生の前で説教するんだろ。いつもの手だ。
紀子　いいから来なさい。
A　ここで言えばすむことじゃないんですか。別に先生に反抗してるわけじゃないんだから。

笑い声が起こり、しばらく続く。

先生、じっとうつ向いて立っている

紀子のサス、フェイドアウト。

部屋の照明に戻る。

紀子、泣き崩れたまま。

貴子　紀ちゃん、ごめんね。無理矢理歌わせて。
紀子　大丈夫。久し振りに歌ったから、声の調子がおかしくなったのよ。それに急にふらふらしたもんだから。

貴子　紀ちゃん、無理をしてそんなに頑張らないで。ね、話してよ。

紀子　何もないって。心配しないで。ちょっと目眩がしただけなの。

貴子　十年振りに会ったのよ。私ね、高校の時こんな友達を持てたことが、今でも嬉しい。ずっと大切にしたい・・・。本音を出し合って、みんなと一緒に取り組んだことが、今でも私を支えてくれている。くじけそうになると、夏の合宿や、体育館のステージや大会の舞台が浮かんで来て、その中に先生や紀ちゃんや、由紀ちゃんやみんなの顔が浮かんでくるの。今頃どうしてるかなーて。看護婦をやめてアメリカへ行こうと思った時も悩んだ。今も親から反対されている。・・・・・そんな時思うの。高村先生だったらどう言うかな。耕ちゃんだったらどうかな。紀ちゃんなら、「自分で決めたことだもの。がんばって」って言ってくれるんじゃないかな」って。

耕治　そういうことってあるよな。俺もいま会社でがんばってるけど、一日中仕事をして、十二時過ぎて帰ってくる。ぶっ倒れるようにベッドに寝て、朝起きるじゃない。高いビルの十五階。部屋にはたった一人。ああ、また朝か・・・・「俺って何なんだろ。」「俺を表現するってどういうことなんだろう。」そんなことを考えてる。でもな、会社をやめても他に何やっていいか分からない。こんなことは会社の人には誰も言えないから、がんばって働いてるけど・・・。

貴子　そうか。一流会社に勤めるエリートでも悩みはあるんだ。

耕治　国際化とかリストラとか、どの会社にも生き残りのために無駄をはぶきスリムな体制にして、最大の効率をあげようとしているからね。厳しいよ。

美和　土曜や日曜日はゆっくりできるじゃない。

耕治　ばか言え。家の中で一日中パソコンと向き合ってるんだ。

美和　給料はでるんでしょ。

耕治　出るもんか。

美和　ただ働き？

耕治　うん。

美和　しなきゃいいじゃない。

耕治　そうは出来ない仕組みになってるんだ。自分でやっとかないと全体の仕事が進まなくなるからね。

美和　そうか。大変だね。

耕治　君なんかいいよな。主人を送り出して、後はゆっくりできるんだから。

美和　甘い、甘い。子育てって大変なんだよ。生まれたときから競争が始まってるんだから。三才になる前から、ピアノ、英語、水泳、ダンス、ーなんでもかんでもやらせる。団地の人がみんなそうだから、私だけ放っておくことはできないのよ。

先生は、一人で腕を組み黙って見ている。

耕治　そういうもんか。

先生　教育、狂育、「狂って育てる、」「狂って育つ」・・・

みんな沈黙。虫の声。

由紀　私ね・・・大学を途中でやめてから、何もかも自信を失って部屋の中に閉じこもっていた。そんな時、父がちょっと手伝ってくれって言ったの。公園の中につつじやさつきを植える仕事。やっているうちに楽しくなって、一生懸命手伝った。このつつじが大きくなって、公園いっぱいに咲いたらきれいだろうな。来た人がこの花を見たら、心がほっとするだろうな。・・・なんだか自然に涙が流れて来ちゃって・・・。

沈黙。　虫の声。

先生　・・・自然か・・・。自然っていいよな、自然で・・・。

先生をじろっと見る。

貴子　いろいろあるんだね。悩んでるの私だけかと思ってた。紀ちゃん・・・。

紀子　・・・私・・・七月から学校を休んでるの・・・・・・。明日は行こうって思って、教材の準備も十分して寝るんだけど、どうしも家を出られない。いろんな靴にはきかえてみたり、車の点検をしたり、よし、これで行こう、と思っても、また車を洗ったりしている・・・。

貴子　分かるよ。

紀子　・・・みんなを席に着かせるまでに十分。全員に教科書を開かせようと思ったら授業時間なんか終わってしまう。仕方がないから教科書を出さなくても、机の上に伏さってても、一人で授業を進める。教える進度は決まっているから、無理でも進めないといけない。テストをやると当然悪い。すると、担任の先生や他の先生から、「きちんと教えて力をつけてもらわないと困ります」・・・当たりまえのことよね。そのために私がいるんだから・・・きちんとさせようと思って厳しく叱ると、余計生徒たちは離れていく・・・これじゃいけないと思って、優しくすると」すべていいかげんになってしまう。・・・どうしたらいいのか分からないの・・・。

由紀　大変なんだね。

美和　新聞やテレビではよく見てるけどね。

耕治　覚えてるかな、紀ちゃんが合宿の時ぼくに言ったこと。一匹の鮭が卵を産もうと北の海から帰ってくる途中、発電所の排水口の中に入っていって熱湯が流れてきて、死にかける。その時の鮭のくやしさを想像するんだ。想像力を働かせると心の中に生まれて来るものがある。それを表現するんだ。ーそう言ったよね。偉そうなことは言うけど、紀ちゃん、その生徒たちの一人一人の心

の中を想像したことがあるのか。心の中にある哀しさ、怒り、不満、喜び、くやしさ、ー想像力を働かして、それを自分のものにしたことがあるのか。そして、それを表現してみたのか。ぼくは中学、高校とまじめな生徒じゃなかったからそんな生徒の気持がよく分かる。・・・高村先生がぼくを強引にここへ連れて来た時も、心の中では嬉しかった。・・・担任でもないのに、家を訪ねて来て、ここへ連れて来た。先生だけは、ぼくをまだ見捨ててないんだーそう心の中では思った。劇は下手くそで、みんなに迷惑をかけたけど、みんなが、本気で取り組んでいるのを見て本当はびっくりした。今まで生きて来たぼくの世界とはまったく違ってたからね。

沈黙。

虫の声。

先生黙って飲む。

先生　耕治。「想像する」英語でどう言うんだ。

耕治　・・・イメージ・・・イマージ・・・イメージ。ちがうかな。

先生　だめ！予想通りだ。貴子、どう言うんだ。

貴子　imagine.

先生　名詞は。

貴子　imagination.

先生　形容詞で「想像力に富む」

貴子　imaginable.

先生　違う。それじゃアメリカへ行けんぞ。紀子。

紀子　maginative.

先生　That's it！

耕治　先生、おれたちもう大学へ合格して、卒業してるんだよ。受験時代を思い出させないでよ。「耕治、英語でどう言うんだ」それを聞いただけで、背中に電気が走る。ビリビリ！

由紀　そうそう。

美和　そうですよ。私にも当たらないかと思わず身構えちゃった。

大笑い。（何かいいながら）

由紀　先生、だいぶ酔ってる。

先生　ノン、ノン。これは梅のジュースだ。

由紀　先生、歌を歌って。

先生　ノーノー。俺はな、絶対歌わないんだ。

美和　カラオケでは上手だって聞きましたよ。

先生　小学校一年の時だった。

美和　逃げてる。

先生　音楽の先生がにこう言われた。「高村君、君の声はすばらしい」。続いてこう言われた。「だけどかなり音痴だね」。それから歌わないことにした。俺のライフスタイルになった。

貴子　作り話でしょ、歌わないための理論武装。

笑い。（そうそう、等と言いながら）

先生　それより何より、今から、これを（紙に大きく書いた「柿落し」を見せ）やってくれないか。

貴子　この多目的マルチホールが出来た記念だ。

なんですか、それ？

由紀　か・き・お・と・し・・？

「かきらくし」、「かきおちし」、「しらくし」　などなど声に出して読もうとする。

耕治　これから柿を採りに行くんですか？

先生　よく見てみろ。「柿」じゃないだろ。右側が「いち」「市町村の『し』」じゃないだろ。

貴子　本当だ。右側が「鍋蓋（なべぶた）」じゃなくて、一本の縦線になってる。

美和　わかった！　こけらおとし。

先生　That、right！　（紙の字を見せて）よく見えみろ。ここが一本の縦線だ。

耕治　本当だ。でもそっくりだから気が付かないよ。「こけら」って何のことですか。

先生　木を削った時にできる木切れや、かんな屑のことだ。劇場などを新築して、最後に屋根に残った「こけら」を払い落とすんだ。そこから劇場の最初の公演を「こけらおとし」と言うんだ。

耕治　僕らがここで「柿落し」をするんですか？

先生　そうだ。このマルチ多目的ホールはできたけど、まだ「柿落とし公演」をしてなかったんだ。

美和　台本がないと無理ですよ。

先生　それがな、ちゃんとあるんだ。「エメラルドグリーンー僕たちのふるさとー」

美和　高校の時の劇ですか？

先生　そうだ。

先生、台本を取りに行く。

貴子　どうなってるの？

耕治　急に言われてもできるわけないよ。

由紀　そりゃそうよ。

貴子　紀ちゃんが書いた劇だよね。

紀子　うん。でも、上の大会へ行けなかった。脚本のせいだよ。

耕治　そんなことはないよ。ぼくのせいだよ。

先生、コピーした紙を持って出てくる。

美和　先生、あの劇は一時間ものですよ。無理ですよ。時間もないし。

先生　そう言うだろうと思って、最後の場面だけコピーしておいたんだ

一人ひとりに渡す。

由紀　先生、セリフは少し違うところがありますね。

先生　ああ、ちょっと手を入れたところがある。台本を持って劇をやってもいいけど、アドリブでもOKだ。そこに書いてあるようにボラ役は、浜村貴子、カメは林耕治、幼稚園児ー町田由紀と北川美和、さくらー村瀬紀子（ええ！という声）　照明・音響ー高村五郎。演出ーボラ役の浜村貴子。柿落とし公演、「エメラルドグリーンーぼくたちのふるさとー」のラストシーン。頼むぞ。

貴子　はい。では、ト書きに書いてあることを説明しますので、場面と状況と自分の役目とセリフを確認してください。

各々、台本に目を通しながら発声す者、セリフを声に出して読む者もある。

貴子は台本のト書を基に、動きながら場面などを説明する。

貴子が説明する間に、先生は袖幕の中で照明や音響の調整をする。姿は見えない。

貴子　この庭から向こうは広い海です。鮭のサクラさんは遠い北の海から帰ってきます。（庭に降りて）ここに大きなコンクリートの壁ができています。（紀子、下手の袖幕の中へ。貴子、座敷へ戻りながら）上手の奥からこの海へ向かって川が流れています。亀のジイは、この海辺の岩で日向ぼ

っこをしています。美和ちゃん、由紀ちゃん、あそこの箱足を2つ持ってきて、この部屋の奥へ置いて。（二人、テキパキと行動）幼稚園の子供達は、あの川土手で遊んでいます。ボッコは、ジイがいる岩のそばで昼寝をしています。じゃ、スタンバイしてください。（ハイ、という声）照明さん。Are you ready?（袖幕から、「OK」という声）

ホリの下手や庭に海を表すブルーの照明、続いて波の音。

ジイ、子どもたちにもスポットライト。

下手から鮭のサクラ（紀子）がフラフラしながら出てくる。傷を負い、目が見えない。

サクラ　ああ、なつかしい匂いがする。・・・どこからだろう、この匂いが流れてくるのは。こっちからだ。・・・ああ、いたい！　何があったの。・・・でもこの向こうからなつかしい水の匂いがする。

勢いよく泳いでコンクリートの壁にぶつかって倒れ、立ち上がってまたぶつかり倒れる。

ボラ（貴子）、それを見つめている。

ボラ　じっつぁん、あれ見て。何度も壁にぶつかってる。どうしたんだろ？

ジイ　目が見えないんじゃないか。・・・あれは、サクラちゃんじゃないか。（近づく。ボラも続く）おい、サクラちゃんじゃないか。おい、どうしたんだ？大丈夫か？

サクラ　・・・あああ、その声は、亀の、亀のじっつぁん。

ジイ　そうだ、じっつぁんだ。よう戻ってきたのう。

ボラ　サクラさん、わたし、ボラちゃんだよ。よく頑張って帰ってきたね。

サクラ　ああ、ボラちゃん、なつかしい。

ボラ　体中、傷だらけ。こんな大きなお腹で遠い北の海から帰ってきたのね。大変だったね。

ジイ　さくらちゃん！あの川をのぼって行けば、きれいな水がある。もう少し頑張るんだ。

ボラ　川はこっちだよ。

　手を引いて座敷の方へ行く。

サクラ　あああ、なつかしい水の匂いがする。ここは、私が生まれた所。じっつぁん、ボラちゃん、ありがとう。

　河口で別れる。サクラは手探りで迷いながら川を上っていく。

ボラ　げんきでね。がんばるんだよ。

ジイ　子どもたちが元気で川を下ってくるのを待ってるぞ！

　高い川土手で花を摘んでいた園児の１人がサクラに気がつく。

園児１　見てみてみてみて、みて！

園児２　どがしたん？

園児１　あの川の中に見たことがない魚がおる。

園児２　ふらふらしとる。

園児１　傷だらけ。・・・あつ、もしかしたらサケかも。

園児２　サケ？　ずっと前にみんなで川に放した赤ちゃん？

園児１　そが、そが。先生が何年かすりゃ、またもどってくるかもしれん、云うちゃたが。

園児２　あれがもどってきたん？

園児１　すごいね。

園児２　頑張ったんだね。

園児１　あああ、流される！がんばれ！

園児１２　がんばれ、がんばれ、がんばれ、がんばれ。がんばれ・・・・。

手を叩いて応援歌のように節をつけて大声で言いながら川土手を上手へ歩く。
袖幕の中に二人が消えても「がんばれ」の声は続き、その声に重なって「あなたのふるさと」の前奏曲が（ギターでもいい）流れ、ボラ（貴子）と亀（耕治）の声で歌が始まり、すぐに園児二人（由紀、美和）が続き、サクラ（紀子）も歌いながらゆっくり舞台中央へ集まる。紀子が出てくると、みんなが取り囲むように迎える。
途中から、先生の妻（暁子さん）も歌いながら後ろの方へ出てくる。
気がついた者は先生の奥さんと笑みを交わす。

歌　**遠い遠い旅に出て　あなたはここへ帰ってきた**
水の流れ　川の匂い　みんな　みんななつかしい
そう　ここはあなたの　生まれたところ
緑の山よ　光る若葉よ　流れて下る清流よ
高い空よ　流れる雲よ　ここはあなたのふるさとよ

（「あなたのふるさと」吉川礼子作曲　洲浜昌三作詞）

貴子　はーい。お疲れさまでした。
拍手をし、「お疲れさま」といいながら、ハイタッチなど。
貴子が先生の奥さんに話しかける。

貴子　びっくりしました。いつ帰って来られたんですか。

暁子　今さっきよ。みんな元気そうね。うれしいわ。

由紀　歌は知っておられたんですか。
暁子　もちろんよ。あなた達が、ここで何度も何度も歌った歌だもの。
美和　十年前ですよ。
暁子　十年前なんて、昨日みたいなもんだわよ。動画みたいに鮮明に場面が浮かんでくる。
耕治　その節は、大変、大変、ご迷惑をおかけしました。
暁子　なんのこと？
耕治　喧嘩腰になって大文句をたらたら吐いて、脱出しかけました。
暁子　ええ？　そんなことあったっけ。
耕治　動画みたいに鮮明に浮かんで来るんでしょう？
暁子　そんなこと言いました？
耕治　さっき、言ったじゃないですか。
暁子　わたし、瞬間的に記憶が途切れることがあるの。年のせいかもね。
　　笑い。手を叩く者も
　　袖幕の先生へ向かって貴子が声をかける。
貴子　先生！こけら落としの舞台、終了しました。
先生　よっし！見事、見事。六十五点！
　　全員「ウワー」「やった」等と飛び上がって喜び拍手する。
先生　採点まちがい。八十六点！
　　みんな更に大喜び。紀子を囲んで拍手。
貴子　照明・音響は何店ですか？

先生　九十五点。
耕治　高すぎますよ。
美・由　そうですよ。
先生　だけどな、照明器具や音響の装置は「高かった」んだぞ。
みんな　かんけーなーい。
先生　あああ、また採点間違いをした。三十九点。（みんな「ええ？」など声をあげる）
美和　なんでそんなに下げるんですか？
先生　「Thank you very much for your suplended performance」だ。
耕治　さむーい。零下三十九度。（ブルブル震えながら。）
　みんな大笑い。
先生　演出はこの度アメリカへ発つことになった浜村貴子。脚本は、若き日の村瀬紀子。（肩に手を置いて）君が書いたんだ。「エメラルドグリーンーぼくたちのふるさとー」
貴子　先生は顧問ですか。
先生　もう顧問はいない。
貴子　じゃ高村先生は何ですか。
先生　こけら落としの舞台を無料で提供した百姓の裏方だ。
　全員「オー」と言って拍手。
紀子　先生、一つ忘れていませんか？
先生　なんだ？
紀子　潤色ー高村五郎。

先生　潤色？。

由紀　そうそう。紀子が書いた脚本には、二人の幼稚園児はいなかった。

美和　紀子の脚本では、わたしは「ハゼ」

由紀　わたしは「フグ」だった。

「そうそう」「そうだった」「幼稚園児」なんかいなかった」などなど。

先生　わかった、わかった。追加だ。脚本無断潤色ー高村五郎。

一瞬沈黙の後、「おー」などと声を上げて拍手。

美和　九時までに帰ると言って出てきたから、これでわたし、帰ります。

貴子　私も。耕ちゃんは？

耕治　明日東京へ発つんだ。俺も帰るよ。

由紀　じゃ、おいとましようか。

先生　耕治、お前、梅酒を飲んだけど、車を運転するんじゃないだろうな。

紀子　私が運転します。

先生　そうか、気をつけてな。

貴子　先生、ありがとうございました。

暁子　お元気でね。また来てくださいね。

全員それぞれ、「ありがとうございました」「またきっと来ます」

「さよなら」等々と先に言って玄関を出る。

先生と暁子が玄関先の庭で見送り、玄関へ歩きかけると、紀子が走ってくる。

紀子　先生・・・。（何か言おうとするが言葉にならず頭を下げる）

先生　・・・元気でやれよ。

紀子　・・・はい。

紀子は、頭を下げたまま泣いている。それを見て暁子が近づきハグする。

暁子　昔と変わらない紀子さんを見て、嬉しかったわ。また来てくださいね。

紀子　・・・はい・・・ありがとうございました。

紀子、走って去る。

先生、暁子しばらく見送っていて、話しながら部屋入る。

二人が話していた時、坂道の下から声が届く。

全員　た・か・む・ら・せん・せいー、あ・り・が・とー。

先生　・・・おーい。また夏が来たら、いつでも来いよー。

音楽

先生、暁子、立ったまま手を振る。

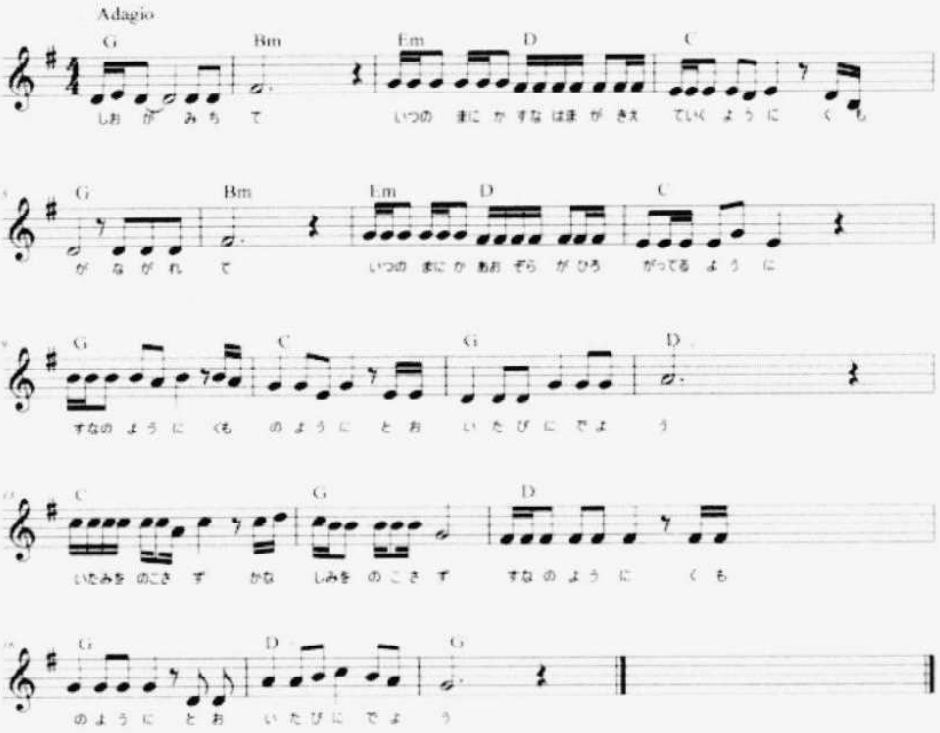
静かに幕が下りる。

脚本『また夏がきて』劇中歌

エメラルドグリーン

―ぼくたちのふるさと―

作曲・藤原規生
作詞・洲浜昌三



エメラルドグリーン―ぼくたちのふるさと―

『また夏がきて』劇中歌

作曲 藤原規生　作詞 洲浜昌三

潮が満ちて
いつの間にか
砂浜が消えているように
雲が流れて
いつの間にか
青空が広がっているように
砂のように
雲のように
遠い旅に出よう
痛みを残さず
悲しみを残さず
砂のように
雲のように
遠い旅に出よう

注　藤原氏は島根県立大田高校、国立音楽大学声楽科卒、多数のオペラに出演、合唱指導者としても活躍中。日本合唱指揮者協会副理事・事務局長、オペラアーツ振興財団事務局長、NHK合唱コンクール審査委員。国立音楽大学講師など。(2023年度時点)

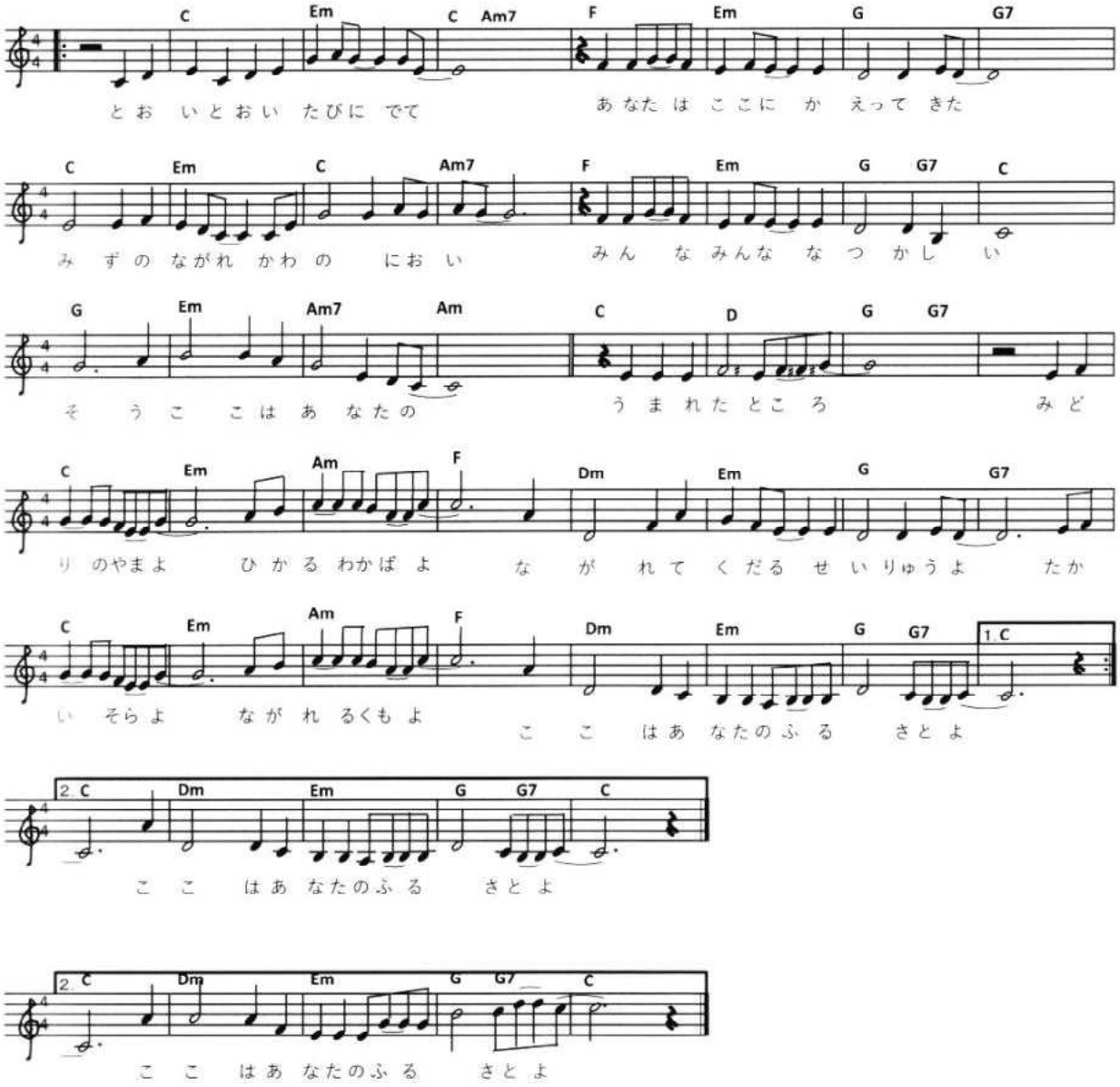
この曲は、藤原氏が高校時代に、大田高校演劇部顧問、洲浜に依頼され、創作劇「エメラルドグリーン―ぼくたちのふるさと」(昭29)の劇中歌として作曲。その後、創作劇『また夏がきて』の劇中歌としても歌われた。

この楽譜は、「洲浜昌三脚本集」(門土社総合出版)には掲載されているが、脚本「また夏がきて」(「高校演劇Selection2001下」)の劇中歌には楽譜が掲載されていない。今回、作曲者により若干の微修正を入れて印刷した。

(20230604　洲浜記)

あなたのふるさと

作詞 洲浜昌三
作曲 吉川礼子



遠い遠い旅に出て　あなたはここへ帰ってきた
水の流れ　川の匂い　みんな　みんな　なつかしい
そう　ここはあなたの　生まれたところ
緑の山よ　光る若葉よ　流れてくだる清流よ
高い空よ　流れる雲よ　ここはあなたのふるさとよ
ここはあなたのふるさとよ